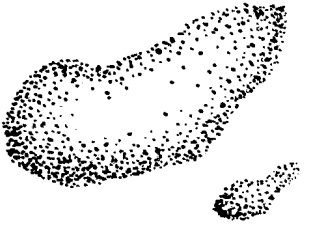
長く暑い夏の一日

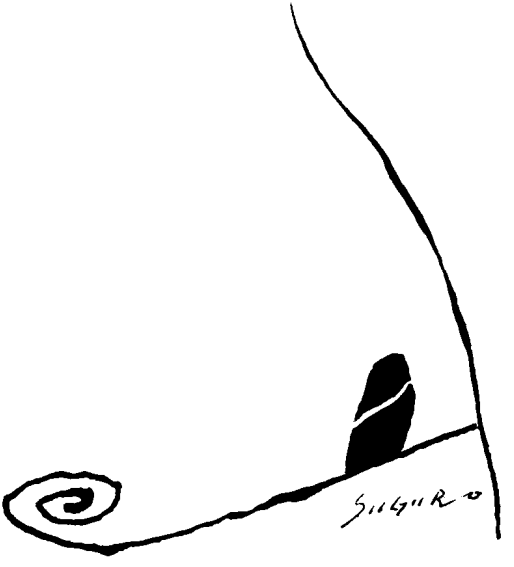
渡辺淳一



長く暑い夏の一日

渡辺淳一

講談社



長く暑い夏の一日

昭和六十年七月十日　第一刷発行
昭和六十年九月五日　第三刷発行

著　者　渡辺淳一
発行者　野間惟道
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一／郵便番号一一二
電話東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　株式会社黒岩大光堂
定　価　九八〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。
© Junichi Watanabe 1985 Printed in Japan

ISBN4-06-200306-6(0)（文1）

長く暑い夏の一日　目次

午前　5
午後　47
夕暮　99
初更　143
深夜　195

裝幀　勝呂忠

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

長く暑い夏の一日

午前

病院の朝は早い。

六時になると、早くも廊下を行き来する跫音(あしおと)がし、話し声がする。そろそろ朝一番の検温がはじまり、それとともに付添婦が顔を洗いだし、患者がトイレに行きはじめる。

当直室はトイレの手前にある水洗場の隣なので、サンダルの音が、壁ごしに響いてくる。

当直医の尾津正和はそれを眠りのなかでききながら、寝返りをうった。

部屋は六畳間で、中央に布団が一組敷かれている。右手にロッカーが並び、左の壁ぎわには麻雀卓がおしやられ、その上に空になったウイスキーのボトルとグラスが散らばっている。

昨夜は二時間ごとに犬に注射をする実験があって、眠ったのは朝の三時であった。それまで医局の仲間が麻雀をつき合ってくれたが、終わるとみな帰ってしまった。おかげで一人で悠々と眠れたが、当直室は東向きで陽が射すのが早い。まだ六時だというのに、今日一日の暑さを予感させる太陽が、早くも白茶けたカーテンから洩れてくる。こんな薄手のカーテンではおちおち眠れない。厚手のカーテンに替えるように用度係に頼んだが、一向に替えてくれる気配はない。

「ちくしょう……」

尾津はタオルケットを頭までかぶった。今日は九時から病室廻診があり、そのあと外来にでて診察したあと、午後から尿管形成の手術がある。かなり面倒な手術で二時間くらいはかかりそうだが、そのためにも充分眠っておかなければならない。

こんな明りと雑音くらいで起きるものかと、さらに堅く目を閉じたとき、電話のベルが鳴った。

「なんだよう……」

タオルケットをかぶったまま、尾津は不機嫌な声を上げる。

昨日は大きな手術はなかったから、とくに問題になる患者はいないはずである。軽い痛みとか排尿障害程度なら、看護婦のほうで適当にやっててくれればいいのに。舌打ちしたい気持をおさえて枕元の受話器をとると、年輩の男の声だった。

「城西医大の泌尿器科ですか?」

外からの電話は、みな交換手をとおしてかかってくるのだから、泌尿器科に決まっている。尾津は無愛想に答える。

「そうですが……」

「こちら箱根の芦ノ湖病院ですが」

そんなところ知りはしない。尾津が受話器を持ったまま欠伸をかみころすと、男が続けた。

「実は昨夜、この近くで交通事故がありまして、運転していた男性がガードレールに衝突して頭を打って入院したのです」

ここは脳外科ではない、朝から間違い電話の相手をさせられてはかなわない。

「こちらは泌尿器科ですよ」

「わかっていますが、その患者がもう駄目かと思いまして……」

死にそうな患者ではますます関係がない。かまわず電話を切ろうとすると男がいった。

「実は奈良原先生にお話をきいていたものですから」
奈良原といったら、尾津の主任教授である。
「もしかすると、腎臓提供者として、どうかと思いまして」
「失礼しました。先生はどちらの？」
「私は芦ノ湖の病院に勤める土屋という外科の医師ですが。奈良原先生に、もし腎臓移植に適当な患者がいたら、連絡して欲しいと頼まれていたものですから」
「それはわざわざすみません。で、その患者のお名前は？」
「森茂夫という三十五歳の男性です。血液型はA型です」
「それじゃ、その人の腎臓をいただけるのですか」
「いま家族に話しているのですが、一応、納得してくれそうなものですから」
「その患者さん、やはり駄目ですか？」
「きたときから、もちろん意識はありませんし、耳から脊髄液の漏出がありまして、頭蓋底骨折と思われます。いま点滴や酸素吸入をしていますが、あとせいぜい二、三時間かと思います」
「わかりました。すぐ教授に連絡してみますから。あ、僕は泌尿器科の尾津といいます」
ランニングとパンツ一枚だが、尾津の頭は完全に醒めていた。
「折返し、すぐこちらからお電話しますから、番号を教えていただけますか」
尾津は麻雀卓の上にある紙片と、わきにころがっていたボールペンを手にとった。
「当直で眠っていたものですから、失礼しました」
電話番号をききながら、尾津は改めて目に見えぬ相手に頭を下げた。

枕元の時計を見ると六時五分である。

芦ノ湖病院から連絡を受けた尾津医師は、ただちに教授の自宅に電話をかけた。
こういう緊急の場合には、教授の家へ直接電話をかけてもいいことになっている。早朝だったが、教授はじき電話口にでた。
「それじゃ、すぐ芦ノ湖病院に急行してくれ」
事情をきいた奈良原教授は、すぐ腎臓を受取りに行くよう指示した。
「君と、誰かもう一人探して、二人で行ってもらったほうがいいな」
「向こうに着き次第、提供者の血液をもらって大学のほうへ戻しましょうか」
「長引くようなら、そうしたほうがいい」
「その場合は摘出できるまで、僕が向こうに残ります」
腎臓の提供を受けても、それが躰に馴染む人と、馴染まない人がいる。これを検べるには、血液型とともに組織適合性をたしかめなければならないが、あらかじめ提供者の血液があると、この判定がスムースにすすむ。
「誰か、病院の近くに住んでいるのはいないか」
「村上君なら、車で五分ほどですが」
「じゃあ、すぐ彼を呼び出してくれ。君は車を持っているのか」
「ありますけど、村上君のほうが新しいですから」
「パトカーに頼んでもいいが、到着してすぐ摘出できるかどうかわからないから、まずその車で行ってくれ」
「東名高速を行けば、いまなら、一時間半くらいで行けると思いますが」
箱根の周辺なら、ドライブがてら何度か行って知っている。
「腎臓の摘出に必要な器械類は向こうにもあるだろうが、念のために、一応、揃えて持っていった

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ほうがいい。それから保存箱と冷えた灌流液を忘れるなよ」
「大丈夫です」
摘出した腎臓はまず灌流液で血液を洗い出したあと、電解質液に浸しまわりを冷却しながら、特殊な保存容器にいれて運ぶ。
「向こうに着いたら、すぐ連絡してくれ。それに応じてこちらも準備をすすめる」
「もし着いて、死んでいたら、どうしましょう」
「一時間以内なら、灌流冷却して摘り出せ。なんとか間に合うかもしれん」
「わかりました」

尾津が三期下の村上医師を呼び出して、一緒に病院を出たのは午前七時だった。
「驚きましたよ、まったく」
村上は病院の近くのマンションに住んでいたおかげで、朝から呼び出される破目になったことを悔いていた。
「田舎のお袋でも、悪くなったのかと思いました」
「お袋さん、どこか悪いのか?」
「ちょっと血圧が高いだけですけど、こんな早くから電話がかかってくることなんか、ありませんからね」
村上はまだ眠そうな顔で欠伸をする。
「おい、しっかりしろよ。途中で事故でも起こしたら大変だ」
「大丈夫ですよ、運転は自信があるんですから」
初めは尾津の車で行くつもりであったが、村上が一ヵ月前にスポーツタイプの新車に買替えたば

かりなので、それで行くことにした。
「それより、ちょっとガソリンが心細いんですが、どこかにスタンドはありませんかね」
「青山通りに出れば、夜通しやってるところがあるだろう」
箱根までは片道で百十キロ余だが、高速で行くので、余裕をもってガソリンをいれておくにこしたことはない。
「ところで、このガソリン代は医局でもってくれるんでしょうね」
「細かいことをいうな、もちろん高速料金もだすから安心しろ」
箱根行きといっても、移植手術をする腎臓を受けとりに行くのだから公用である。
「じゃあ、安心して飛ばします」
病院の前の通りを南へ下って青山通りに出ると、二十四時間営業のガソリン・スタンドがあった。村上はそこで車を停めて満タンにする。
「ところで先輩、朝飯はどうするんですか」
「そんなものは向こうに着いてから考えればいい。それより眠気ざましにコーヒーでも飲んでいこう」
尾津はスタンドのなかにある自動販売機から、インスタントコーヒーを二つ買ってきた。
「このまま、まっすぐ渋谷から高速に乗ります」
「東名で、御殿場まで行くんだろう」
「それでもいいんですけど、朝のうちなら厚木から小田原に出て、箱根新道で行ったほうが早いと思います」
「じゃあ、任せた」
どちらでも距離はあまり変らないようだが、早く行けるにこしたことはない。

「それじゃ、提供者（ドナー）の血液を採り次第、僕だけ先に大学へ帰るわけですか」
「先に、組織適合性を調べなければならないからな」
組織適合性の検査や交叉試験は、大学に戻らなければできない。
「でも、ドナーがまだ生きていたら、先生は残らなければいけませんね。もし、そうなったら、車はどうします」
「そのときは、そのときだ……」
尾津の役目は、最終的に腎臓をもらってくることだから、現地に行ってみないことにはわからない。
「しかし、親切に連絡をくれたものですね、芦ノ湖の病院ですか」
「土屋という外科の先生だ。俺達の先輩で、教授とは親しいらしい」
もしその医師がそのまま黙って見過したり、他の病院に連絡したら、腎臓移植はおこなわれないか、他の患者におこなわれることになってしまう。一人の医師の連絡が、一人の患者の運命を変えることになる。
「でも今日できたら、移植の手術は、久しぶりですね。三〇八号の田岡さん以来でしょう」
尾津達の病院で、最近腎臓移植がおこなわれたのは、半年前の二月の初めであった。田岡安夫という二十二歳の青年に、母親が自分の腎臓を提供したのである。母と子だけに血液型が同じで拒絶反応も少なく、経過は良好であった。最近はあまり病院に現れないが、たしか父親がやっている建設会社の事務を手伝っているはずである。
「このところ、ずっと生体腎でしたからね」
たしかに、その前の手術も、父親が自分の腎臓を子供に提供したもので、いずれも生きている人から摘り出した、いわゆる「生体腎」の移植であった。

「死体腎は、二年ぶりかな」
「二年半ですよ。僕が入局した翌年で、手術場で見学したから、覚えています。提供者は同じ病院にいた内科の患者さんですよ」
「脳血栓だったけど、角膜も腎臓も全部提供してくれた」
生体腎とは名のとおり、生きている人からとった腎臓である。両の脇腹のうしろの位置に一個ずつ腎臓があるので、健康な人ならその一つを摘り出しても障害はない。
生体腎の移植の場合は、両親とか兄弟、配偶者などの腎臓をもらうことが多いが、血縁同士だと組織適合性がよく、手術の結果もきわめて良好である。
だがすべての腎臓病患者が、肉親から腎臓をもらうというわけにいかない。こういうとき、死んだ人の、いわゆる死体腎があれば絶好である。他人の腎臓ではあるが、血液型が合い、組織適合性がよければ、生体腎と変わらない働きを示す。
しかしこの場合は、死後できるだけ早く腎臓を摘出することが必要である。死んだあと長く放置しておいては、酸素不足のために細胞がやられ、腎機能が発現しなくなる。
理想的なことをいうと、死の直後、遅れてもせいぜい三十分以内に摘出したものが好ましい。
このため、欧米をはじめ日本でも、最近は腎臓バンクが設立され、死後、腎臓を提供することに賛同した人達が登録され、腎臓提供者カードを持つようになってきた。
だがこのカードを持って協会に登録された人数は、欧米にくらべて、はるかに少ない。自分の死後、腎臓が他人の役に立つとはわかっていても、勝手に体を傷つけられて、腎臓を摘り出されると思うと、つい尻込みしてしまう。
どうせ死後は焼かれるだけといっても、まだそこまで割り切れる人は少ない。
いま全国で、人工腎臓によって辛うじて命をつないでいる人は、六万人に達するが、そのうちの

三割に当たる一万八千人の患者さんが腎臓移植を望んでいる。だがこれまで腎臓移植の手術で健康をとり戻したのは、二千人にすぎず、しかもそのうち死体腎の移植を受けたのは四百人に満たない。

腎臓移植を希望する患者は多いし、それをおこなう技術もあるが、肝腎の腎臓がない。

全国の腎不全患者は、どこかで腎臓を提供してくれる奇篤な人はいないかと待ち望んでいる。

そのチャンスが偶然、とびこんできたのである。

寝呆け眼の尾津が慌てたのも無理はない。

車は渋谷のインターから首都高速に乗った。

「しかし、その家族は、よく納得してくれたものですね」

村上がコーヒーを飲みながらきく。

「一応、納得してくれそうだということで、完全に了解したかどうかは、まだわからない」

「自分の家族でも、死んだあと体をいじられるってのは、あまりいい気はしませんからね」

「でも、どうせ助からないものなら、死んだあと、腎臓がこの世に残って、他の人の体のなかで生きていると思うほうが納得できるんじゃないか」

「それはそうかもしれませんが……」

「医局員はみな、腎移植普及会に登録されることになる」

「本当ですか……」

「俺達は現実に、他人の腎臓をもらって手術をしているわけだから。そんなことをしている者が、腎臓を提供しないって理屈はないだろう」

「でも、僕達はそうやって働いてるんですから、できたら提供するのは勘弁して欲しいですね」

村上は若いから、死んだあとのことなど、気にしないのかと思ったが、そうでもないらしい。
「死んだあとは焼かれるだけだから、腎臓ぐらい摘られたっていいじゃないか」
「でも体に傷をつけると、成仏できないっていいますからね」
「古いねえ、お前は……」
「祖母にきいたことがあるんです」
たしかに、そういう考えが、腎臓提供のネックになっている面がないわけでもない。
「どっちにしても、お前のように女遊びしてちゃ成仏できないよ。また彼女を変えたんだろう」
「変えたんじゃなく、前のに振られたんですよ」
早朝の首都高速は大型トラックがわがもの顔に並んで進路をはばんでいる。村上はそのあいだをたくみに抜けてスピードをあげる。
「とにかく、俺達はみな提供者カードを持つことになる」
「それは、医者全部ですか」
「いや、いまのところは、泌尿器科の移植に関係している連中だけだ」
村上が情けない顔をしているので、尾津は苦笑した。
「泌尿器科の医者になって、失敗したか?」
「そんなことはありませんけど……」
せっかく朝早くから起きて運転している男を、これ以上、くさらせてはまずい。
「お前はまだまだ長生きするから、大丈夫だよ」
尾津が慰めたとき、車は首都高速から東名高速に入った。
七時半を過ぎて、そろそろ都心へ向かう上り線は混みはじめてきたが、下り線は空いている。
「今日も暑くなりそうですね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com